

Unit 24 副詞的表現の修飾機能

副詞(的表現)は、典型的に形容詞、動詞句、文を修飾します。まず、形容詞との関係を見てみましょう。形容詞は名詞を話者がどのように見ているかを示す言語的な指標です。「離婚」を辛い経験として見ていれば、a painful divorce 言うでしょうし、それでほっとしたという見方をとれば a happy divorce と表現するでしょう。どの形容詞を選ぶかで話者の主観的態度が示されます。辛い気持ちを強調的に表現しようとする、形容詞を増やして a painful sad divorce などとすることができます。しかし、〈辛かった〉こと自体を強調したい、という欲求を感じたときには、形容詞の数の追加では追いつきません。そこで活躍するのが副詞です。It was a {very, extremely, unbelievably} painful divorce. と気持ちにぴったり合った副詞を選択します。強度の調整に用いられる副詞には以下のものがあります。

強く : very, so, absolutely, perfectly, extremely, really, quite, such, truly, too, a lot, how, much, way, a whole lot, dead, enough

どちらかといえば : kind of, sort of, more or less, rather, fairly, somewhat, merely, a little too

弱く (少し) : a little, a little bit, slightly, not very

文例

It's going to be very hot today. (今日はとても暑くなるぞ。)

The situation is extremely serious. (状況は極めて深刻です。)

You're absolutely right. (まったくおっしゃるとおりです。)

Don't make too much noise. (うるさくしすぎないように。)

His story was a whole lot stranger than mine. (彼の話は私のものよりずっと不思議な内容だった。)

This is way better. (これのほうがずっといい。)

I was dead wrong. (私がまったく間違っていた。)

I think this room is a little too small. (この部屋では少し小さすぎます。)

It was quite successful. (それは大変な成功だった。)

This ramen soup is too salty to drink. (このラーメンの汁は飲むにはしょっぱすぎる。)

He is so bad a player that he burdens the team. (彼はプレイが下手でチームの負担になっている。)

写実的な強弱の表現方法

ふつうは形容詞の前に副詞を持ってきます。これが基本的なやり方ですが、次のような後置型のものもあります。

形容詞+as/like +名詞 〈…のように〜だ〉

例. cute [as a button]

(ボタンのようにかわいい) 、

clean [as a breeze]

(そよ風のように清潔な) 、

smart [like him]

(彼のようにかしこい)

形容詞+ enough to +動詞句 〈…するのに十分〜だ〉

例. rich [enough to buy the island]

(島を買えるほど金持ち)

easy [enough for three-year old children to read]

(三歳児でも読めるほど簡単な)

これらの後置型のもものは表現力を豊かにするにはたいへん便利なものです。写實的に、強弱の調整を行う働きをもっているといってもいいでしょう。ここで押さえておきたいことは、例えば rich enough to buy the island では enough と to buy the island が連動するはたらきをするという点です。

He is rich enough.

He is rich enough to buy the island.

He is rich enough. だけでも意味は伝わりますが、それをさらに具体的・写實的に述べたいときに、to ... の情報が加えられているのです。enough が to buy the island を喚起する、と言ってもよいでしょう。この喚起力は、お馴染みの too ...to とか so...that 構文にもみられます。

She was so happy that she couldn't help smiling.

She was too excited to recognize her friend in the party.

that she couldn't help smiling(笑いを我慢できなかった)や to recognize her friend in the party (パーティに友達がいるのが分かるのに)は、それぞれ happy と excited という形容詞を修飾する副詞節とみなすことができます。

副詞(語、句、節)が修飾するのは形容詞だけではありません。副詞の修飾機能は多彩で、下の例のように

名詞句、動詞句、前置詞句、文、そして副詞をも修飾します。

名詞句	Ask the boys for help, <u>especially</u> [those big boys].
動詞句	We <u>happily</u> [lost the game].
前置詞句	He used to put his watch everywhere, but <u>especially</u> [under the table].
文(節)	<u>Happily</u> [they lost the game].
副詞	He has <u>almost</u> [always] had a part-time job.

副詞は形容詞を修飾するもので、それが名詞を修飾するといえば、違和感を感じるかもしれません。しかし、上の例のように、(名詞というより)名詞句全体を修飾するケースはよくみられます。especially those big boys は「特にその大柄の男の子たち」という意味であり、「特に」は後続の名詞句全体にかかっています。I like all kinds of fruit, especially bananas.は「どんな果物でも好きだけど、特にバナナが好きだ」ということですが、この especially は bananas を強調する副詞です。

動詞句を修飾する副詞と文を修飾する副詞は紛らわしいことがあります。下の訳を比べてみると両者の差異がはっきりするでしょう。

We happily lost the game.

(私たちは喜んで負けた)

Happily, they lost the game.

(うれしいことに彼らが負けた)

前者は試合に負ける負け方に対して happily という修飾をしており、後者は、「彼らが試合に負けた」という事実について、話し手が「うれしいことに」と感情的なりアクションをしているということです。

文頭での副詞の重要なはたらき

上の happily のような文頭での副詞のはたらきは重要です。ここで注目しておきたいのは、話し手の発話内容における「発話態度」を表明するというはたらきがあります。これは「情報表示機能」の重要なひとつで、発話態度の表明には、以下のような場合が含まれます。

対話に向かう態度

honestly speaking 正直に言えば、frankly 率直なところ、to tell the truth 本当のことを言えば、between you and me ここだけの話だけど、strictly speaking 厳密な言い方をすると、roughly 荒っぽい言い方だと、simply put 端的に言えば、ironically 皮肉っぽく言えば、seriously 大真面目で言えば

Simply put, his attitude deserved to be criticized.

(端的に言えば、彼の態度は批判されてしかるべきだ。)

これから語ろうとする状況へのリアクション、感情評価

unfortunately 不運なことに、surprisingly 驚いたことに、sadly 痛ましいことに、fortunately 幸運なことに、interestingly 興味深いことに

Sadly, two people were killed in the accident.

(痛ましいことに、ふたりが事故で亡くなった。)

発言内容への確信の度合い

obviously 明らかに、indeed 本当に、definitely 確かに、no doubt 間違いなく、of course もちろん、actually 実際、probably たぶん、possibly 可能性として

Obviously, I'm not interested in something illegal.

(いうまでもなく、不法なことには興味がない。)

話題の幅

generally 一般的には、specifically 個別的には、linguistically 言語学的には、to be more exact もっと正確には、to be more specific もっと具体的には、technically 技術的には

Linguistically, this is called a "morpheme."

(言語学的には、これは「形態素」と呼ばれる。)

「発話態度」とは、何か発言をする際、発言に対しての話し手の態度（心の状況）のことをいいます。「正直にいうと」「ここだけの話ですが」「荒っぽい言い方をすると」などがそれにあたります。ある種の「ただし書き」のようなものです。「彼の態度は批判されてしかるべきだ」と発言する前に、to tell the truthを加えると「正直なところ」という話し手の態度を示すことになります。

「状況へのリアクション」は、語られる状況についての話し手の感想を表すもので、「残念ながら」「興

味深いことに」といった内容が含まれます。そして、「自分の発言への確信の度合い」を表すには、発話内容に話し手がどれくらい確かさを感じているかを表す副詞的表現を使います。例えば、Obviously, she is wrong. といえ「彼女が悪い」という節の内容について、話し手は「それは明らかなことであると思っている」ということを表しています。

「話題の幅」は、発言内容が該当する範囲を示すということです。「一般的には」「具体的には」「言語学的に言えば」などがそれにあたります。

文頭と文尾の副詞

文頭の位置と文尾の位置にはかなり自由に副詞的表現をもってくることができます。例えば、下の例をみてみましょう。

[Well], [in Tokyo nowadays], [to get the feeling of Japan], I feel I really have to look for it.

(で、最近の東京だと、日本らしさを感じるには、本気で探さなくてはいけないと思うんだよね。)

But [recently], [even in Japan], career switching has become very common.

(でも、最近、日本でも、転職はごくありふれたことになったよね。)

ここでは、それぞれ複数の副詞情報が連続して文頭の位置で使われています。こういったことは、日常会話ではよくみられる現象です。しかし、これは言いたいことをいうのに試行錯誤した結果であって、言いたいことがうまくまとまっていないという印象を与えます。このようなことは日常会話では自然なことですが、文章英語では文頭で副詞情報が重なって示されることはほとんどありません。

一方、文尾の位置では、日常会話、文章英語を問わず、原則として必要な副詞情報を並べることができます。以下はその例です。

例1.

Jill walked [down the hill], [across the bridge] and [through the field] [to the church][in order to talk to Jack about their future].

(ジルは丘を降り、橋を渡って、野原を通してその教会に、ジャックと将来のことを話すために行った)

例2.

I was not a confident child when I entered school. But I had a good teacher. She would walk up to

me, [placing her hand gently upon my shoulder] and [smiling at me] [to give me confidence].

(僕は小学校に入ったとき、自信を持った子どもではなかった。でもよい先生にめぐまれた。先生は、よく僕のそばに歩いてきて、手を優しく僕の肩に置きながら、僕が自信を持てるように微笑みかけてくれたものです)

状態を表す a- のつく副詞

おもしろいことに、He is running. など進行形は現代英語では BE + 現在分詞で表されますが、かつては He is a-running. という言い方をしていたようです。今ではこの形は消えましたが、Bob Dylan の Times they're a-changing (時代は変わる) という 60 年代の歌のタイトルには a- が使われています。この a- は状態を表し、現在は次のような副詞(いくつかは前置詞の機能もある)として残っています。

状態を表す a- のつく副詞

aback, aboard, above, abroad, across, ago, ahead, alone, along, aloud, away

ちなみに、ago は a + go の合成語であるが、〈時間が行った(go)状態にある〉ということから「～前に」の意になったと考えることができます。これの副詞の使い方で注目すべきは、my trip abroad(私の外国旅行)、the sentence above(上の文)のように名詞の直後に置かれ後置修飾の機能を持つということです。しかし、ふつうは、He is abroad.(彼は外国にいる)、He went abroad.(彼は外国へ行った)、He studies abroad.(彼は外国で勉強する)のように動詞(句)を修飾する形で用いられます。